慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 民族芸能における「美しさ」：日本の民俗芸能を中心として |
| Sub Title | "The beautiful" in folk religious entertainment : referring to folk-religious entertainment in Japan |
| Author | 姫野, 翠(Hineno, Midori) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 1968 |
| Jtitle | 哲學 No.53 (1968. 9) ,p.321- 331 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | 1. What is folk-religious entertainment? The word "geino" or "minzoku-geino" is hard to translateinto English. Because "geino" consists of music, dancing, drama and so on. In this chapter I would like to define what is "minzokugeino." 2. Folk-religious entertainment and world view. Prof. Eiichiro Ishida has an opinion that there are two types of world view in the world, and they can be oppose to each otherOne belongs to western society which includes Judaism, Christianity and Islam, and the other category can be found in Hinduism, Buddhism, Taoism and many kinds of ancient religion and folk belief in South Eurasia. These two patterns of world view appear tofolk-religious entertainment on each different norm. 3. Folk-religious entertainment in Japan. In this chapter I would like to explain about Japanese folk religious entertainment in the following points. (1) In relation to life community. (2) In relation to season, nature and year cycle. (3) In relation to life cycle. (4) In relation to belief and magic. 4. What is "the beautiful" in folk-religious entertaiment? In Japan, we have our own "norm of the beautiful," and this norm stands on the world view that belongs to Buddhism and so・ on. Of course folk-religious entertainment can be explained through the norm. But our folk-religious entertainment has many factors which integlate each other, so we have to explain it very carefully. |
| Notes | 守屋謙二先生古稀記念論文集 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0327 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 民族芸能における「美しさ」

## ——日本の民俗芸能を中心として——

# "The Beautiful" in Folk Religious Entertainment

## —Referring to Folk-Religious Entertainment in Japan—

姫　野　　翠
*Midori Hineno*

**Résumé**

1. What is folk-religious entertainment?

The word "geino" or "minzoku-geino" is hard to translate into English. Because "geino" consists of music, dancing, drama and so on. In this chapter I would like to define what is "minzoku-geino."

2. Folk-religious entertainment and world view.

Prof. Eiichiro Ishida has an opinion that there are two types of world view in the world, and they can be oppose to each other. One belongs to western society which includes Judaism, Christianity and Islam, and the other category can be found in Hinduism, Buddhism, Taoism and many kinds of ancient religion and folk belief in South Eurasia. These two patterns of world view appear to folk-religious entertainment on each different norm.

3. Folk-religious entertainment in Japan.

In this chapter I would like to explain about Japanese folk religious entertainment in the following points.

(1) In relation to life community.

(2) In relation to season, nature and year cycle.
(3) In relation to life cycle.
(4) In relation to belief and magic.

4. What is "the beautiful" in folk-religious entertaiment?

In Japan, we have our own "norm of the beautiful," and this norm stands on the world view that belongs to Buddhism and so on. Of course folk-religious entertainment can be explained through the norm. But our folk-religious entertainment has many factors which integlate each other, so we have to explain it very carefully.

## 一 「民族芸能」とは

最近日本のみならず世界各国で民族芸能の保存，記録，復活を盛んにする傾向がみられ，20世紀後半の輝かしい文明の影にかくれ，忘れさられようとしていた様々な芸能が再び脚光をあびるようになった．これはどういう理由によるものだろうか？又民族芸能はそれ自体どのような価値を持つものだろうか？ 角度を変えていえば，昔から民間に伝わってきたこれらの芸能は，どういうわけで現代に生きる私達の共感をよびおこすのだろうか？ このような問題について，主として身近にある日本の民俗芸能[1]に例をとって考えてみたい．

本論に入る前に，まず「民族芸能」という言葉をはっきりさせておく必要がある．普通「ミンゾクゲイノウ」というと，殆んどの人は「民俗芸能」という字を思いうかべるだろう．ある民族の間に伝えられている庶民の芸能という意味での民俗芸能という言葉はより普遍的である．ところが，諸民族の芸能を比較研究するという立場からみると，「民族芸能」という言葉を使いたくなる．この場合「民族芸能」は「民俗芸能」にくらべ，より広い意味を持つものであって，換言すれば各民族に特有な芸能はたとえそれが伝統的なものでなくてもすべて包括されるといってもよいだろう．そこ

で私は，今日ドイツ語の Volkskunde に「民俗学」，Völkerkunde に「民族学」という訳語を当て，それぞれ異った分野をさしているように，芸能を民俗学的な見地から眺めた場合は「民俗芸能」，民族学もしくは文化人類学的見地に立った場合は「民族芸能」という言葉を用いたらよいのではないかと思う．

次に「芸能」という言葉である．これは大変漠然とした言葉で一見摑み所がない．外国語に飜訳するときはいつも悩む言葉である．元来「芸能」という言葉自体は綜合的な意味を持つ．今日の文明社会においては舞踊，音楽，演劇などという専門化したジャンルがあって，その芸術性，創造性を云々されている．これに対して昔から民間に伝承されてきた「芸能」は文明社会の中にあってすら上記の各分野をインテグレイトした形で存在し，芸術性などの要求は二の次である．音楽，舞踊，演劇，美術等々の諸要素が互に不可分の関係で絡みあっているだけでなく，宗教又は呪術，地域社会，そこに存在する様々な集団（地縁集団，血縁集団，年令階梯制による集団等々），生業，季節等々の様々な要素との密接な関係をたち切ることはできない．当然民族（もしくは民俗）芸能に芸術的個性を求めることは不可能であり，かえって，芸能は没個性的であるといえるだろう．芸能はそれが「芸能」である故に，最近流行しているようにこれを舞台にのせたならば，民族芸能としての本来の意義は半減してしまうにちがいない．

## 二　民族芸能と世界観

私達は自国の民族芸能についてはもちろんのことだが，他民族の芸能をみても多かれ少なかれ共感を抱くものである．それは私達がホモ・サピエンスとして，全人類に共通した物の考え方，感情のあらわし方とその受取り方を知っているからである．ただ各民族はそれぞれ独自の嗜好性を持っていて，それによって様々の要素の選択を行う．ここで民族的な特色とい

うのがでてくる．卑近な例をあげれば，日本人がロシア民謡に親しみやすいというのは，短調の音楽を好むという民族性によるのだろうし，又短調から長調へ，長調から短調への移り変りの自由さが共感をよぶのだろう．反対にジャズが意外に浸透せず，理解されないということは，まずあのアフタービートのリズムが日本にはなかった，言葉を変えていえば日本人の嗜好にあわないためとも考えられる．ホモ・サピエンスとして元来同じであるべき人類の文化は，各民族がおかれた環境の中で長い間育てられた結果，諸民族それぞれが独自のものを持つようになった．文化の諸要素は長い民族の歴史の中で独自に変化したり，他へ伝播したり，他から影響を受けたりして姿を変えているが，ここにも民族としての選択の「好み」があらわれていることは否定できない．このような傾向は，各民族に独自の世界観をつちかうことになる．そしてその世界観を背景にして民族の思想や歴史が展開していくのである．

石田英一郎先生は様々の機会に，全世界の人類の持つ世界観は大別して対蹠的な両極をめぐる二つのカテゴリーに分かれると論じている．[(2)]片方はユダヤ教・キリスト教・イスラム教のグループであり，他はヒンドゥー教・仏教・道教・南ユーラシア大陸の多くの古代宗教や民間信仰などを包括するグループである．紙数の関係でここで詳しく述べることはできないが，両者の主な特徴を対記すれば，次のようになる．

| キリスト教などのグループ | 仏教などのグループ |
|---|---|
| 1. 唯一の超越神 | 1. 所与の存在としての宇宙 |
| 2. 創造された宇宙 | 2. 宇宙の中の神々 |
| 3. 不寛容と非妥協性 | 3. 寛容と融通性 |
| 4. 男性原理 | 4. 女性原理 |
| 5. 天の思想 | 5. 大地の思想 |
| 6. 宇宙の有限性 | 6. 限定されない宇宙 |
| 7. 宇宙の合理性 | 7. 宇宙の非合理性 |

このように対蹠的な世界観の母胎である文化は，つきつめていえば前者は遊牧民の文化，後者は農耕民の文化ということになる．これはとりもなおさず西洋の文化対東洋の文化である．目を転じて民族芸能をみると，この世界観の相異によってその性格が異ってくることはいうまでもない．唯一神が天上にあって，宇宙のすべてが神の摂理のもとにあるキリスト教的世界観のもとには，神々や自然の怒りをしずめたり，或いはこれを喜こばせて何かを得ようとするたぐいの民族芸能は育つはずがないのである．これに反して第二のカテゴリーに属する世界観のもとでは神々は人間により近い所に存在し，信仰や呪術と結びついた多彩な民族芸能が開花するわけである．そこで第一のカテゴリーに属する世界観のもとでは，唯一神の讃美，その祭りに関する以外は，集団労働や通過儀礼，純然たる娯楽のための芸能となり，第二のカテゴリーに属する世界観のものでは，それが労働や娯楽のための芸能であっても必ずといってよいぐらいそこに宗教や呪術が絡みあったものとなる．これは「宇宙の非合理性」[(3)]をよくあらわしたものといえよう．ところが，現在西欧にみられる民族芸能の中には，第一のカテゴリーに属する世界観のもとでは発生するはずのないたぐいのものがある[(4)]．これは，それを持つ民族が今日では完全にキリスト教的な思想と文化によって覆われてはいるが，その民族の歴史のある時点までは第二のカテゴリーに属する農耕民的世界観が彼等を支配していて，それが持つ「寛容と融通性」ゆえにキリスト教を受入れ，あるいはキリスト教に支配されるようになった後も，民族芸能に残存していると考えてよいだろう．

## 三　日本の民俗芸能

以上のような見地にたって日本の民俗芸能をみた時，そこに日本人の世界観が大変よくあらわれていることを感ずる．私達の思想や宗教は老荘の教えや仏教に多く影響されているとはいえ，その根本にあるものはそれ以

前からある多神教的もしくはアニミズム的な考え方である．ここでは又，シンクレティズムも容易になされる．これはとりもなおさず日本の民族芸能の特徴とするところではないだろうか．日本の民俗芸能は呪術や宗教と強い結びつきを持っている．研究者によっては祭と不可分の関係にあると断言する人もいるくらいそれは根強いものである．これを根本として次のような諸特質が展開する．

1．生活共同体との関係

民俗芸能には盆踊りのように全部落をあげて参加しなければならないものと，宮城県の日高見流神楽のように村外不出を誓った長男にだけ父親が伝えた，というように参加資格の厳格なものとあるが，一見相反するようなこれらの例は，いずれも民俗芸能が生活共同体と不可分の関係にあることを示している．その参加者で様々であっても，常にこれを支えているのは生活共同体全体であって，ただそれに直接たずさわる，あるいはイニシャティヴをとるのが青年団であったり，老人の念仏組であったり，特定の家筋の人だったりするだけである．

2．季節・自然・年中行事との関係

明治以前の農耕民，あるいは漁撈民にとって一番の関心事は，どのようにしたら自然を怒らせずにこれと融和し，その恩恵を最大限に受けることができるかということだったろう．これは彼等が生きていく上に絶対必要なことであった．そのためには四季折々の祭は欠かせないものであり，多くの場合それには芸能が伴う．春浅く行われる豊作祈願又は予祝の芸能は，有名な三河の花祭り，八戸のえんぶりを始めとして各地にある．田遊びにしばしば伴う性的な所作は，神も又人間のように妊むもので，その結果の恵みを私達が受けるという地母神的な考え方から出たものであり，ここにも仏教以前から根強く残っている世界観をみることができる．雨が降らなければ雨乞いの踊をし，豊作であればそれをことほぎ，神に感謝する豊年踊をし，というように year cycle に従って芸能も周期性をもってい

る．正月の三河万才，盆の盆踊りのように年中行事と密接な関係を持ったものもある．このように自然もしくはそれを司どる神との友好を保つための芸能であるから，もし何かの理由でそれができなかったり，不完全なものであったりすれば，たちまち祟りがあって平和な生活は危機に瀕してしまう．そうなれば今度は神の怒りをやわらげるための手段が必要になってくる．天の岩戸の神話にもみられるように，踊りはそのための最良の手段であったようだ．又，悪疫が流行した場合もこれを送るために踊りをしたし，それが固定してしまって京都のやすらい花のような芸能になった例も少くない．

3．Life cycle との関係

前項であげた芸能が定期的なものであり，折口信夫先生が「週期伝承」という言葉であらわしているものであるとすれば，人間の一生に伴う諸儀式（通過儀礼とよばれる誕生，成人，結婚，葬式などを中心としたものに伴う儀礼）及び家の建築その他の慶事に附随する儀式に関連する芸能は不定期的なものである．ところでLife cycleと芸能とは二つの接触面を持っているとみられる．埼玉県の餅搗踊りは祭礼の際にも行われるが，子供の紐解祝の折にも行なうし，結婚式における「高砂」もこれに類するものであろう．このように通過儀礼と芸能が一体となるような接触のしかたがある反面，その芸能の持つ性質の如何にかかわらず，その担い手である演者が属する年令集団が限定される場合がある．すなわち Life cycle の側から芸能をみると，幼児，少年，青年，既婚者，成年，老年はそれぞれ芸能において分担する役割がちがう．熊本県人吉町の臼太鼓踊りに例をとると，青年は 15 才になると踊組に入り，その中ですぐれた者は鉦打ちになり，20 才以上になった時，太鼓打ちの役に欠員が生じた場合はそれに選ばれるというように年令によってはっきり役割がきまっている．栃木県栗山の獅子舞の踊り手は17才から42才までの若い衆に限られ，この年をすぎると師匠格になるという．概観してみれば民俗芸能の担い手は青年が多く，昔の

若衆組，今の青年団が主催する場合が大変多い．少年が一定の年令になると踊り手として激しい訓練を受けなければならない芸能がよくあるのは，成人式（イニシエーション）というか，成人になるためはげしい試練を経なければならないという考え方から出たものだろう．もしある人が，周囲に様々の芸能がある所に育ったと仮定すると，幼時には稚児とか子供の舞い，青年期には浮立[5]系の勇壮な踊りとか獅子舞，壮年期には後進の指導，後見役，囃子方など，老年期には念仏講などによる念仏踊や弥勒（ミロク）踊，そして一生を通じて盆踊り，というように，年令が移るに従って異った芸能の担い手になると想定される．このように芸能と life cycle は，意外に近い関係にあるといえよう．

4．信仰，呪術との関係

これまで度々述べてきたように日本の民俗芸能はその殆んどすべてが多かれ少なかれ信仰もしくは呪術と深いつながりをもっている．芸能を通じて神と人が親しく交わり，人々は神の恵みに浴しようとしてきた．このような態度が芸能の保存に大きな協力をした．ある芸能がもしできなかったり，不完全に上演されたりして神の怒りを買わないように，細心の注意を払って古いものを確実に踏襲した人々の努力は，伝統的なものを寸分の違いなくしっかりと受継いだのである．舞台装置，音楽，美術のたぐいについても同様のことがいえる．上演するについても同様の努力がなされるのであって，これにたずさわる人があらかじめ別火で食事するなどして心身を浄め，斉戒沐浴して事に臨む例は静岡県西浦の田楽を始めとして多数みられる．

信仰や呪術との結びつきはまた踊り場や衣裳，道具類にもみられる．盆踊りの輪の中心に高い櫓を組んだり，竿や傘を立てたりするのも，田植踊りによくみられる花傘をたてるのにしても，これは神のよりしろなのである．又行列式の盆踊りは神送りの性格を持つ．盆踊りに仮装したり異様な粉装をする地方もよくあるが，これはそういう姿をしたことによって通常

の当人とは異って，神あるいは精霊になっているのだと考えてよいだろう．ともかくも芸能というものは神や精霊と交わるもっとも有効な手段であるようだ．

## 四 「美しさ」について

舞台芸術として洗練された舞踊や演劇，演奏効果を計算された音楽など芸術的に完成されたものは確かに美しい．然し一見泥臭く，幼稚とすら思われる民俗芸能がより美しい場合も多々ある．それは何故だろうが？ 一言でいえば「無駄がない」からである．無駄なものは長い間の伝承過程においてふるい落され，必要なものだけが，混在するのではなくてインテグレイトされた形として残った．たとえそれが長崎おくんちの傘鉾や蛇踊りのように華麗なものであっても，それは必要上なったのであって，ただ漫然と派手になったのではない．民族芸能には本来純然たる意味での「見物人」はいない．たとえ見ている人がいたにせよ，彼等はやはり「見る」ということによって共同の担い手になるわけである．

ここに三重県のある漁村のごく一般的な「くどき」による盆踊りに例をとって「その無駄のない美しさ」を説明しよう．踊り場の中央には質素な櫓が一つ，これすらも昔はなくて，音頭は樽の上に乗って竿をさしてくどきを歌ったという．この傘はお盆の精霊のよりしろであると同時に，マイクロフォンのなかった時代には，声を散らさずに周囲へ伝える道具でもあった．傍らに太鼓がひとつ．踊り場の隅には，送り盆の日だけは新盆の家から集められた切子燈篭に灯が入って並べられるが，それ以外の時の照明といったら空に輝やく満月だけ．踊る人々は月の光を全身に浴びて浮き上ったようにみえる．踊る衣裳は様々だが，通常とは違った服装をし，又は仮装をする．一見てんでんばらばらの衣裳は月光によって統一された輝きをもってくる．踊りの先頭に立って輪を導く青年団員の持つ提灯がぽつぽ

つとみえる．空中からみれば，音頭とりと太鼓を中心としたきれいな同心円になっているだろう．歌の文句は「鈴木主水」や「八百屋お七」などの七七調のくどきで，音頭とりはゆるい節廻しで朗々と歌う．合の手は踊り手全員が歌い，太鼓の単純な力強いリズムがそれに伴う．旋律は七七，七七で一回，これの無限の繰り返しであって，踊りのふりも同様である．一見単調のような踊りは，踊ってみると案外洗練されていて，しかも長く続けていてもあきないし疲れない．そのうちに踊り手は段々と陶酔の状態になる．踊りにしろ．歌にしろ伝承の期間中に余分なものは陶汰されてきたらしく，没個性的であるが美しい．手や足の動きは絶対に止まってしまうことがなく，常に流れている．全体として最低限に必要なものだけが揃っていて，それが私達の心に共感をよびおこすのである．

神に奉納する性質の芸能には随分と派手で，あでやかなものがある．そたはやはり，神も人間と同じように美しいものを好むという考えのもとに出発しているようだ．衣裳や花笠などの五色の紙や布はそれ自体意味をもっているし，綾子舞の衣裳は優雅そのものである．清浄を意味する白色の使用は美的な面からいっても大変効果的である．

然しこうした衣裳その他の美しさも，その踊り場という背景前にたった時，始めてそれを充分に発揮するのであって，殊に屋外で行われるものは，その季節における自然との調和において，春ならば燃えるような新緑，夏ならばぎらぎら光る紺碧の空と海，などに配したときに綜合的な美しさを作り出す．だから最近流行しているように，民俗芸能を舞台にのせて上演すれば，その美しさは大巾に減ってしまう．

日本民族の持つ農耕民的世界観は周囲と融和的な，寛大な芸能を作りあげた．その美しさも周囲と融和して始めて最高に発揮される．同様なことが建築や造形芸術の面についてもいえるのではないかと思う．そうして文明の発達によって疎外された私達二十世紀の人間は，人間性の回復のため，未分化のものへのはげしい憧れをもつ．こういうことが，民族芸能への関

必の高まりになったのだと思う．大変不勉強でやや腰くだけの議論になってしまったが，世界観と美意識の問題について今後もう少し考えてみた上で，何かの機会に又発表してみたいと思う（東京大学大学院博士課程）．

註（1） 郷土芸能という言葉（郡司正勝先生）や民間芸能（柳田国男先生）という言葉も用いられる．

註（2） 「東西抄」p. 47～p. 68 を参照．

註（3） 超越神が宇宙を創造し，これを司どっていることを認めないのだから，宇宙の森羅万象の運行は合理的な秩序に従うものではない．むしろ神々，精霊，人間の意志が錯綜したプロセスではなかったかと石田先生は考えている．

註（4） フレイザーの「金枝篇」に多くの例をみることができる．

註（5） 中世から近世にかけて，町衆の勃興に支えられて，祭りの芸能が華やかに飾りたてられ，一つのエポックを作った．これが風流（フリュウ）であるが，これは太鼓を胸につけて踊る西日本の「浮立（フリマウ）」系と，東日本に分布する，太鼓を胸につける「一人立ちの獅子」系に大別される．

**主な参考文献**

石田英一郎「東亜抄」 1967　東京
郡司正勝「郷土芸能」 1658　東京
本田安次他「日本の民謡と民俗芸能」 1967　東京